

# 世紀転換期ドイツ・プロテスタント神学における「神秘主義」

—R. オットー理解の観点から—

藁 科 智 恵

**Chie WARASHINA.** 'Mysticism' in German Protestant Theology at the Turn of the Century – in Light of Understanding R. Otto –. *Studies in International Relations* Vol.41, Consolidated Edition. February 2021. pp.81-91.

This thesis explores the meaning of the word 'Mystik (mysticism)' in the late 19<sup>th</sup> century and in the beginning of the 20<sup>th</sup> century in German Protestant theology and analyzes Rudolf Otto's discussions on mysticism and Luther in his most famous book *The Idea of the Holy* (1917).

Among the Protestant theologians at the time, 'mysticism' had two opposite meanings. Some considered 'mysticism' to be dangerous for Christianity and others regarded it as an important part of Christianity and religions.

Otto had been under the influence of Ritschl in terms of interpretation of mysticism in his earlier book *Luther's Conception of the Holy Spirit* (1898). Ritschl was one of the most influential theologians, who were against the role of mysticism in Christianity. In Otto's argument in *The Idea of the Holy*, however, he emphasizes the importance of the numinous in Luther's mystical experiences in understanding his religious thoughts.

Analyzing how Otto's interpretation of mysticism differs from the previous one, which is shown in this thesis, would be fruitful for having a wider perspective of Otto's thoughts on the relation between religion, mysticism and ethics.

## 構成

0. 問題の所在
1. RGG での叙述
2. プロテスタント神学における「神秘主義」評価の両義性
3. リッチェルの「神秘主義」理解
4. オットーの『聖なるもの』における叙述
5. 結び

## 0. 問題の所在

神学者・宗教学者ルドルフ・オットー（1869-1937）は、彼の主著『聖なるもの』（1917）において、それまで神の側から説明されてきた宗教経験を、ヌミノーズ（das Numinose）という術語によって人間の側から人間の知覚に起きる経験と

して記述した。この著作では、キリスト教のみならず、非キリスト教諸宗教における宗教経験も扱われている。その中で大きな位置を占めるものの一つが神秘主義的経験である。「神秘主義 Mystik」という言葉をキリスト教信仰と相容れないものと捉える傾向は、現代においてもしばしば見られる。しかし、オットーは『聖なるもの』において、キリスト教の各宗派の教義学が合理化されてきたにも関わらず、カトリックならびにプロテスタントにおける神秘主義にも非合理的な要素は生き生きと保たれているとし、ハインリッヒ・ゾイゼ（1295-1366）、十字架のヨハネ（1542-1591）、ヤーコプ・ベーム（1575-1624）、マイスター・エックハルト（1260-1327）等において、ヌミノーズなものが語られる様子を挙げている<sup>1</sup>。

本稿において着目したいのは、オットーが『聖なるもの』において、初期の著作『ルターにお

『聖霊の直観』<sup>2</sup> (1898) における「神秘主義」理解はアルブレヒト・リッチェルの影響下にあったものの、その後それは変化したと叙述しており、自身の「神秘主義」理解におけるリッチェルの影響を相対化して論じている点である。『ルターにおける聖霊の直観』は、学生であったオットーが当時正統主義神学の拠点であったエアランゲンから、自由主義神学の拠点とされたゲッティンゲンへ移った後に書いた著作である。この初期の著作と『聖なるもの』における神秘主義理解の共通点、相違点を探ることはより体系的にオットーの神秘主義理解を解明することにつながるだろう。

このことから、本稿では、オットーがそこから学び、自らの学問を展開していった 19 世紀後半から 20 世紀前半のプロテスタント神学において「神秘主義」がどのように語られた言葉だったのか、リッチェルの神秘主義理解とはどのようなものであったかを確認した上で、『聖なるもの』におけるオットーの「神秘主義」理解を解明していきたい。

## 1. RGG での叙述

まず、世紀転換期のドイツ・プロテスタント神学において「神秘主義」がどのように描かれているかを見ていきたい。そこで、『歴史と現代における宗教 Religion in Geschichte und Gegenwart』(以下 RGG) の叙述から確認していこう。RGG は、20 世紀初頭にゲッティンゲン大学の宗教史学派を中心に作られた、神学、宗教学に関する事典である。現在までに 4 版を重ねている<sup>3</sup>。RGG における叙述の確認を通じて、当時のドイツ・プロテスタント神学において共通の理解とされていたことが見えてくるだろう。

まずは、最近の研究が反映された最新版の RGG 第 4 版(1998 年から 2005 年にかけて出版)における神秘主義 *Mystik* の項目を確認しておこう。それによれば、神秘主義という概念は、ヨーロッパ宗教史の展開と結びついており、そのような概念を他の諸宗教に適用することへの批判が存在するとされる。そして、この概念の定義の試みとして、「現象学的」(神秘主義に関する理解を前

提として、さまざまな文化における神秘主義的経験、社会的類型がその概念に帰属せられるという意味において)、「概念的」なものが挙げられる。さらに、宗教学的には、神秘主義はある特別な意識の経験として扱われる一方で、他方では、神秘主義という経験の真実性を問題とするのではなく、こうした経験が遺している資料(痕跡)をどのように歴史的な文脈において理解するのかということを問題とすべきであるとされる<sup>4</sup>。第 4 版の記述からわかるのは、それが、宗教学において 1990 年代以降になされた「宗教」概念批判と同様、宗教的なものの「本質」ではなく、その歴史的な文脈を捉えることから研究対象に迫ろうとする、近年の研究潮流を反映した形で書かれているということである。つまり、ここでは歴史的な叙述に非常に多くが割かれている。この点が第 4 版において大きく変わった点である。第 3 版までは、キリスト教、あるいはキリスト教周辺の諸宗教に関する神秘主義が中心に扱われていたのだが、第 4 版では、それまで独立した形では立てられていなかった、イスラム教、ヒンドゥー教、道教の神秘主義という項目が立てられている。

歴史的な側面に着目した叙述が多い傾向は、宗教哲学的に神秘主義を扱う項目においても同様である。この部分においても、神や究極的な実在との直接的な経験への探求という定義に触れた上で、ここ数十年の傾向として上述のことについて触れられている。つまり、神秘主義的な経験は、その社会的、歴史的、宗教的な文脈から離れては理解できないとされ、その経験がどのように表現されるか、表現される言語、形式等々へ着目する必要が指摘されている<sup>5</sup>。

世紀転換期、オットーの『聖なるもの』(1917)が出版された時期に最も近いのが、1909 年から 1913 年に出版された RGG の第 1 版である。その項目は、次のようになっている。I. 概念的なことと宗教史なこと、II. キリスト教の神秘主義、III. 新神秘主義 *Neue Mystik*、IV. 神秘主義の要点。そして、I の概念的な問題について論じられている箇所では、*Mystik* と *Mystizismus* との違いについても触れられている。「*Mystizismus* は、以下の判断を含んでいる。つまり、*Mystizismus* と

表される神秘主義 Mystik の形態は、病的な緊張に苦しむ、あるいは、超感覚的な存在との秘密に満ちた接触に入ることへの見込みのない努力によって支配されていることだという判断である<sup>6</sup>。」換言すれば、Mystizismus という言語使用には、何者かとの接触に入ろうとしているがそれが徒労に終わってしまうだろうという消極的な価値判断が含まれているとする。

また、第1版の新神秘主義という項目においては、次のような事象が描かれている。さまざまな領域に浸透していく科学技術を志向する文化が時代的な雰囲気ともなっていく中で、より内面的なものへの欲求が深まり、神秘主義というものが再び人々の意識にのぼるようになってきた。そして、この神秘主義は19世紀の後半には正当な扱いを受けず、ほとんど忘れ去られていたことも述べられる。このように神秘主義が再び人々の意識において前景化してくるとともに、神学においては若きフリードリヒ・シュライマハーに対しての関心が起こり、哲学、自然科学の領域では、グスタフ・テオドル・フェヒナー(1801-1887)や、インドの仏教についての関心が起こった。さらには、ドイツにおいて当時の神秘主義的な書物を掘り出していく作業を担っていたディーデリヒス出版にも言及されている。また、ここで挙げられる、ヴィルヘルム・ベルシェ(1861-1939)やヘルマン・ビュトナーのような新神秘主義者らは、古い神秘主義の直接的な展開というよりも、その時代、つまり一方では物質主義への、他方では一面的な理性宗教、意志の宗教 Willensreligion への対抗と捉えられている<sup>7</sup>。

## 2. プロテスタント神学における「神秘主義」評価の両義性

19世紀後半のドイツにおいては、実証主義、唯物論的な世界観が広く支持されており、特にダーウィニズム的な唯物論は幅広く受け入れられていた。さらに、科学技術の発展により社会は進歩していくものという認識が強く共有されていた。このような中で、魂の救済、体験 Erlebnis といった、唯物論的な世界観への対抗の契機とな

るような人間の内面性といったものが強調されるようになる。マースは、当時のプロテスタント系の出版物に掲載された記事のタイトルから、神秘主義への関心が大きかったことを指摘する<sup>8</sup>。1920年代後半になると、ドイツ神秘主義(特にヤーコプ・ベーム、マイスター・エックハルト)への関心がさらに高くなっていく。マースは、神秘主義に対する広い層の関心は、第一次大戦中に徐々に見え始め、さまざまな領域に広がっていったとし、神秘主義の傾向を、当時の文学、音楽、造形芸術、哲学、シュタイナーの人智学、東洋の諸宗教の影響において見出している。この点に関しては、RGG第2版においても言及されており、戦争後に神秘主義への関心が高まったとの叙述が見られる。そして、この状況の背景には、合理主義の世紀であった19世紀の拒絶という意識があったのだとマースは指摘する。これらの神秘主義的な潮流は、多くの場合において危険視されていた<sup>9</sup>。

20世紀初頭において、プロテスタント神学における「神秘主義」への関心は大きくなっていった。このことは、プロテスタント系の雑誌において神秘主義について多くのことが語られていることからわかるが、この神秘主義という概念の定義、この概念が何を指すか等についてはほとんど触れられていない<sup>10</sup>。つまり、この概念は学術的な定義がなされないまま使用されているのである。このような概念使用の不安定性に関しては、RGG第1版において、神秘主義という概念が非難の言葉として使用されていることが言及されていたことが想起される。さらに、このような非難の言葉として使用される場合は、厳密に学問的なものとしてではなく、定義が曖昧な論争的な言葉として使用されていると記されている<sup>11</sup>。

次の文章は、1916年に出版された『教会年報』に掲載されたものである。

「あちらでは、つまりドイツ神秘主義においては、今日理解されているように、信仰はエネルギーであり、それによって内的なものが効力あるものとされるのである。こちら、つまりルターにおいては、信仰とは神によって与えられるも

のを掴むことである。あちらでは、信仰は人間の霊 (Menschengeist) の開花であり、こちらでは、神のことばと秘跡によって神から与えられる贈り物なのである。あちらでは、宗教や敬虔さ (Frömmigkeit) においては人間において意識にあるいは現象にあらわれる世界内的な諸力の横溢から起こる人間の投影が重要なのであり、こちらでは世界を世界内的に貫徹し、超世界的にも統治する生き生きとした人格的な神の投影が重要なのであり、つまりそれはその目的の遂行のためにこの世界に向けられたことばを通じたキリストにおける救済の行いを通じた神の投影が重要なのである。そして、信仰とはこの神の投影を掴むことである。あちらでは、世界内的な諸力がその生命の秘密とともに発展し続け完成することが重要となる。こちらでは、罪の赦しや負い目を取り除かれることにより、神の愛から永遠なる浄福な生が与えられ、神との共同体、そして彼のものとの共同体へと赴くことになるのである。そして、この共同体は、今の世界の時代が、神によって作られる新たな時代にとって代わられることによって初めて実現するのである<sup>12)</sup>。(筆者がドイツ神秘主義の解釈に下線、キリスト教の解釈に二重線を付した)

ここでは、神秘主義とキリスト教が対比され、同じ言葉が両者においてどのように解釈されるかを対照させながら論述されている。例えば、信仰はドイツ神秘主義においてはエネルギーとされるが、キリスト教においては神によって与えられるものを掴むこと、とされる。このように、信仰、宗教、敬虔さについて両者の解釈が描かれている。ここでの解釈では神秘主義はこれらを人間側からの事象、行為と解釈し、キリスト教においてはこれらはすべて神から与えられるものとされている。

また、1921年の『教会年報』では、次のような記述も見られる。

「宗教的思考の領域において神秘主義が存在権を認められれば認められるほど、神秘主義は、人間の魂の中に、ましてや大衆に至ってはなおさら、

きのこのようにひどくはびこることとなる。時代の精神がそれを促進し、芸術においてもそれはカリカチュアに至るまで蔓延している。最近の詩においてそれは最も深いもののようにみなされている。それは常に、軟弱な女性化された (effeminiert) 時代の付属品であった。高く称賛されているインドの詩人ラビンドラナート・タゴール、彼に『キリスト教世界』が熱狂して特集記事を捧げているが、彼のような人たちが、その軟弱な神秘主義とその本質の変動性によって、我々民族を完全に女性化 (verweiblicht) しているのである<sup>13)</sup>。(下線筆者)

ここでは、神秘主義への警戒感、特にインドの詩人、思想家ラビンドラナート・タゴール (1861-1941) に対するプロテスタント側の警戒感が示されている。タゴールは、1913年に非西洋人として初めて「ノーベル文学賞」を受賞し、欧米やアジア各国で、大きな関心を惹くこととなる。ドイツにおいても同様で、オットーはマールブルクにおいてタゴールに会っている。この叙述においては当時の女性に対する見方が明確に現れており、神秘主義を形容する言葉として使われている。そしてタゴールの詩にみられるような神秘主義が、ドイツ人を軟弱にしており、それは憂慮される事態であることが述べられている。このような記述はあるものの、宗教思想における神秘主義の存在権を認め、認めた以上は、それを単なる危険なものと烙印を押すのではなく、それと批判的に向き合うことが賢明であろうことも記されている<sup>14)</sup>。

このようにプロテスタントの中では一般的に神秘主義を危険視する言説が多く見られる一方で、第一次大戦後には、自由主義的な神学者のグループの中で神秘主義が積極的な関心を惹くこととなる。その顕著な例の一つが、雑誌『キリスト教世界』である。この雑誌においては、神秘主義が好意的に扱われる叙述が見られる<sup>15)</sup>。そして、ここではキリスト教における神秘主義の持つべき積極的な役割が論じられている。

また、神秘主義に積極的な意味を見出す議論を展開した神学者を多く擁するのが、1890年前後にゲッティンゲンにいた若手神学者たちを中心に

形成された宗教史学派といわれる人々である<sup>16</sup>。宗教史学派の組織神学者とされるエルンスト・トレルチ(1865-1923)は、神秘主義について次のように述べる。

「そのような神秘主義の中で働く諸力は、すなわち具体的な宗教に対して自らを原理的に自立させることができ、その具体的な宗教から自らを切り離し、自ら自身の理論を立てることができる。そしてその理論は、それがあからさまな否定であろうと、寓意的に解釈し直すことであろうと、具体的な宗教やその神話あるいは教義の代わりとなるものである。それによって、神秘主義は、独立した宗教的な原理として、あらゆる宗教的な出来事の本来的な普遍的な核として自らを感じる。そしてその核とはさまざまな神話的な諸表現に扮しているだけなのである<sup>17</sup>。」(傍点筆者)

このように、トレルチは神秘主義という現象は実際に生活の中に存在する具体的な宗教の核となるようなものであると述べる。さらに、宗教的な出来事を、絶対的な存在と有限な存在との間の関係の表現と解釈するような宗教哲学が神秘主義から生み出されるとし<sup>18</sup>、宗教哲学を展開する上での神秘主義の持つ重要性をも指摘している。

ルドルフ・オットーもまた、神秘主義を好意的に捉える神学者の中に位置付けることができる。彼が神秘主義をどのように捉えていたかについては、『聖なるもの』における叙述を中心に後で述べていこう。

ここまで見てきたように、当時のプロテスタント神学においては「神秘主義」を危険なものとして批判する立場、「神秘主義」に積極的な意味を見出す立場の両方が見られる。このような状況をどのように理解できるだろうか。ここで思い出したいのは、RGGの第1版において叙述されていたように、「神秘主義」という概念が定義されないうまま、非常に論争的な意味を持たされて使用されていたということである。特に『教会年報』に掲載された記事からは、神秘主義が強く敵視されている様子を窺うことができる。「神秘主義」に何を見るかという点で、それへの評価が変わって

いることから、それが学術的な定義が共有された術語としては存在していなかったことがわかる。

### 3. リッチュル「神秘主義」理解

次に、オットーが自らの神秘主義理解がその影響下にあったと述べる、神学者アルブレヒト・ベンヤミン・リッチュル(1822-1889)の神秘主義理解について確認したい。彼はベルリンに生まれ、ボン、ハレ、ベルリン、ハイデルベルク、チュービンゲンで学び、チュービンゲンでフリードリヒ・クリスティアン・パウエル(1792-1860)に師事した。1846年にボンで教授資格を取得し、1852年に員外教授、1859年に正教授となり、1864年にゲッティンゲンで組織神学の教授となる。そしてリッチュルは、ゲッティンゲンにリッチュル学派を形成するに至る。

リッチュルの神学はそれまでの自由主義神学と正統主義神学の両方の要素を持ったものといえる。新約聖書、宗教改革を重視するという点ではそれまでの自由主義とは異なっているが、それらをカント主義に依拠して解釈する仕方は自由主義的な要素を積極的に取り込んでいる。新正統主義、弁証法神学の代表的人物の一人とされるカール・バルト(1886-1968)は、リッチュルについて次のように述べている。

「リッチュルは啓蒙主義を克服しようとする、ロマン主義の関心事によって中心的に規定された、それまでのすべての試みを放棄した。彼はむしろ完成された啓蒙主義の理論的ならびに実践的な哲学に、つまり反形而上学的なモラリストとして決定的に解釈されたカントに精力的に立ち返り、その視点からすれば、一つの実践的な生の理想を偉大かつ不可避的な仕方でも可能ならしめるもの、ないしはその実現として、キリスト教を理解することができると考えた。…すなわち、ここでは決然たる態度をもって、一方でこの実践的な生の理想そのものが把握され肯定され、他方でキリスト教、聖書、とりわけ宗教改革が、この生の理想を根拠づけ保証することに奉仕させられる。ひとはリッ

チュルが聖書的ならびに教義史的道具立てを幅広く用いたという事実によって、彼にとってこの生の理想が重要であり、究極的にはそののみが重要であったということについて、惑わされてはならない<sup>19</sup>。」

バルト自身は、19世紀の自由主義神学の中で学びつつもそこから袂を分かち、「神のことばの神学」ともいわれる弁証法神学を形成していく。このことから、自由主義神学者の代表的人物ともされるリッチュルに対する評価は手厳しいものとなっているが、リッチュルの持つ特徴が、バルトによって先鋭化した形で表現されているものとしてこの叙述を捉えることが可能であろう。バルトが、リッチュルにおいては「実践的な生の理想そのもの」を肯定するために「キリスト教、聖書、とりわけ宗教改革」が奉仕させられていると表現するのは、カント的に宗教を道徳的なものとして、人間的なものとして扱うリッチュルのあり方が表現されているといえる。

さらに、バルトはリッチュルの神秘主義理解についても叙述している。その際バルトは、リッチュルの主著である『義認と和解』（1870-1874）という著作のタイトルに注意を促す。バルトは、この著作のタイトルの二つ目の言葉「和解」に強調点が置かれており、リッチュルにおいては、「実現された人間の生の理想」を意味するのだという。さらに、以下のように続ける。「和解」は「義認」の「意図された結果」なのであり、この結果のみにリッチュルは関心を持つ。和解の状態とは、神が「信じる者たちに対して父として向き合い、信じる者たちは子として、神への全幅の信頼をもつ<sup>20</sup>」ことである。そして、神は信じる者に、この世に対する精神的支配を与え、神の国における仕事に就かせる。この状態は、「キリスト教的完全性の状態」である。この状態は、「宗教的には神的摂理に対する信仰、謙遜、忍耐、そして祈祷に、倫理的には職業活動と人格的な徳の形成に存している<sup>21</sup>。」ただし、神の国に生きるということは、共同体の内部でのみ、倫理的召命を受けた仕事に就くことによるのみ可能であり、職業における誠実さがキリストの模範の成就であるとさ

れる<sup>22</sup>。そして、「和解がこの意味ではなく、つまりこの生の理想の実現としてではなく、行為に表されるところには、義認もまた存在しない<sup>23</sup>」。罪の赦しと義認の目的は、人間にこの活動が可能であるようにさせるということに尽きる。よって、神の国での活動、つまり職業と徳の形成における活動でないような、いかなる行為も存在することは許されなくなる。つまり、「この活動を通りすぎて神へと向けられた行為」は存在する余地がないのである。ここから、バルトは次のようにいう。

「そこからリッチュルは敬虔主義の激しい敵となった。彼は敬虔主義を修道制の路線への復帰であるとして非難した。そこから彼は神学におけるすべての形而上学の敵となった。形而上学は経験可能な神の働きにのみ依拠する代わりに、さらにまたあるいはまずもって、即自的な神に依拠しようと欲する。そこから彼は神と人間の意志を飛び越える宗教性としての神秘主義の敵となった<sup>24</sup>。」

バルトによって「神秘主義の敵」と位置付けられるリッチュルであるが、ここでリッチュルの神秘主義理解について確認しておこう。

リッチュルは、神観念、倫理という観点から、神秘的合一 *unio mystica* に関する伝統的教義に対して批判を加えている<sup>25</sup>。以下、その批判の要点を見ていこう。

まず、神秘的合一 *unio mystica* は、信仰を汎神論へと導くこととなり、それによって、神の子の人格が神へと埋没してしまう。つまり、神の子の人格が重要なのであり、神秘的合一によって、世界は非人格的な法則が支配する世界になってしまう。また、もしもこのような極端な先鋭化が起こらないとしても、キリスト者が世界から目を背けることへとつながってしまうこととなる。しかし、実際は、キリスト者はこの世的なさまざまな課題の中に神を見出すのであり、キリスト者は誠実な労働において世界を支配するべきであって、世界を否定するべきではないとする。

さらに、神秘的合一という教義によって、人は神の臨在というような陶酔のごとき幸福な感情の中にいたいと願うが、しかし、このような感情の

横溢状態は、ずっと続くわけではないので、神秘家たちは、神の恩寵から切り離されているというような日照り状態を嘆くこととなる。そして、歴史的なイエスの福音が、神秘家たちによって無価値にされてしまう。なぜなら、それは神秘家にとっては前段階にすぎないからである。このことは、センチメンタルな感覚へとキリスト者を誘惑し、イエスへの畏敬の念を損なってしまふ。

また、神秘的合一によって、意識的、道徳的な意志の行為がその意味を無価値化されてしまう。なぜなら、それは、意識的な道徳的行いの裏に、無意識的な魂の背景を想定し、そこにおいて神と人が一つになると考えるからである。このことから、神秘的合一という教義は、誤ったスコラ学的、新プラトン主義的な心理学であり認識論であると批判する。

つまり、リッチェルが神秘主義を批判する要点となるのは、キリスト教信仰が汎神論になってしまう点（神の人格性が失われてしまう点）、歴史的なイエスの福音が無価値化されてしまう点、この世から目が逸らされてしまう点であるといえる。

#### 4. オットーの『聖なるもの』における叙述

次に、オットーの『聖なるもの』における叙述を詳細に確認していこう。オットーは、『聖なるもの』第14章の脚注に以下のように叙述する。

「私の『ルターにおける聖霊の直観』(1898)の85頁に、『そして神の信仰は単純なものではなく、…人間を超えたものおよび永遠なるものに対する、それ自体によってのみ定義可能な根本感情の…』と書いた部分を参照してほしい。—当時私はこの処女作を、神秘主義に対する私の姿勢からして容易に認められるように、まだ全くリッチェルの影響のもとで書いた。しかしルターのみならず、あらゆる正真正銘の神の概念における非合理的・ヌミノーズな刻印は私にははっきりと分かっていた。そこから時とともに神秘主義に対する別の評価が現れざるをえなかったし、また聖霊の問題は本来、86頁の文に含まれているという認識

も持たざるをえなかった。その文とは、『そのためには別のものが必要である。すなわちすべての「ことば」と…漂いつつも、平かな感情の安らげきうねりの中で』である<sup>26</sup>。」

冒頭にも述べたように、ここでオットーは、『ルターにおける聖霊の直観』における自らの神秘主義理解は、リッチェルの影響下にあると述べている。本稿においては、『聖なるもの』におけるオットーのルターおよび神秘主義に関する叙述を中心に辿っていこう<sup>27</sup>。この点をまず明らかにすることで、他の著作との相違を捉えることへつなげられるだろう。

しかしその前に、この引用箇所でもオットーが参照を指示している『ルターにおける聖霊の直観』の該当部分の全体は挙げておこう。

「そして神への信仰は、人間のその救済者への最も高められたような単純な信頼ではなく、それは、人間の神への信頼、つまり被造物の創造者への信頼というものとどまるのである。それは、完全に独自の根本感情によって規定されているものであり、それ自体によってのみ定義可能である、超人間的なもの、永遠なるものへの根本感情によって規定されているのである<sup>28</sup>。」

この箇所において、オットーが強調するのは、「完全に独自の根本感情」「それ自体によってのみ定義可能である、超人間的なもの、永遠なるものへの根本感情」という部分である。

さらに、この脚注が、どのような叙述部分につけられているかを見てみよう。その部分は、オットーが『聖なるもの』において挙げるヌミノーズの要素のうちの一つである「畏るべき」「優越」を導入したのは、ルターの用語である「神の優越 (divina majestas)」「恐るべき意志 (metuenda voluntas)」からであると述べる箇所である。つまり、ルターにおける非合理的要素に『聖なるもの』において重要な位置付けが与えられていることがわかる。

それでは、『聖なるもの』の「第14章 ルターにおけるヌミノーズなもの」における叙述を詳細

に検討してみよう。

まず、オットーは、「プラトン主義」と「アリストテレス主義」との闘争、近代神学における対立は、キリスト教の非合理的要素と合理的要素相互の格闘にほかならないという。そして、ルターにおける非合理的要素は、後に排除され、「傍流のもの」「唯名論的思弁のスコラ学的残滓」とされる。しかし、オットーは次のように指摘する。

「彼の非合理的な要素を扱う際の大事な問題が、実際には何らかの「残滓」ではなく、彼の敬虔の全く根源的であると同時に、全く人格的な、秘められた、暗い、ほとんど不気味なと言ってよい背景にあることは全く疑いようがない<sup>29</sup>。」

そして、彼の敬虔の根源的なものは、彼自身の心情から破り出たものなのだという。

このようなルターにおける非合理的要素の根源性を明確に示すために、注意を促すのが、ルターの『奴隸意志論 *De servo arbitrio*』(1525)である。この著作において論じられる、「神の顕らかにされた顔 *facies Dei revelata*」とは異なる、神において顕らかにされていないもの、神の「恩寵」と対比された「神の優越」「神の全能」についての彼の「特異な思弁 *mirae speculationes*」にオットーは着目するのである。そして、このルターの思弁を捉える上で重要なのが、ルターはこれを学問的論争、哲学的論争として行なったのではなく、敬虔なキリスト教徒が自らの信仰と生活のために知る必要があるものとして捉えているという点である。さらに、オットーはルターがこの著作を自らのもっとも重要なものとして捉えている点について言及する。とりわけこの点は、リッチェルとの対比において際立つものである。リッチェルは、ルターの『奴隸意志論』を「失敗した駄作」と呼んだのに対し、オットーはこの著作はルターの宗教的感情を理解するための「鍵」であるとしているのである<sup>30</sup>。

ルターにとって神は「みずからを純粹な善で満たしている」神、つまり合理的に捉えられる神であるが、彼は心を怯ませるような神の深淵を知っている。そして、その深淵とは、その前では、あ

らゆるものが「ことば」に避難せざるをえないようなものなのだという。

「ルターが、しばしば繰り返される魂のびくびくとした不安な状態のもとで、そこから逃れようとするこの恐るべきものは、単なる正義を要求する厳格な審判者ではない。なぜならこの審判者はまさにまた「啓示する神」でもあるからだ。それと同時にその神はまた、「神であること」自体の持つ畏るべき優越のもとにある「啓示することがあり得ないこと」によって、その神であるのだ<sup>31</sup>。」

つまり、人が震え怯えるのは、律法を犯したことにではなく、被造物そのものが自らの「隠れなき」被造物性を知るからなのである。

そして、恩寵の議論においても、ルターはこの「深淵」の危険について警告していることにもオットーは注意を促す。そして、ルターの神の「ことば」への高い評価や、「ことば」によって「啓示される」神に、しがみつくような点というのは、ルターにおけるヌミノーゼな非合理的体験を前提にした上で、よく理解できることなのだという。

「私は一度（だけ）でなく、それで死の危険に晒されるほど悩まされた。（それについて）私たち貧弱で哀れな人間がとつおいつ思案しても、まだ神の約束の光を（一度も）信仰によって捉えることができないでいる。それでも私たち弱き者にして無知な者は（その方のほうへ）無理やり引っ張られ、神の奇跡の捉え難い光の捉え難い優越を追い求め、理解しようとするのである。その方が、人間の至り得ない光の中に住み給うことを私たちは知らないと言っても言うのか。それでも私たちはそこへ行こうとする。そのみかそこへ行けると思い上がってさえいるのだ。…私たちが優越を求めるのであるから、栄光のほうに不意に訪れたり、上から降ってきても、何の不思議があろうか。

神の極め難く、理解し難い意志について確かに教えるべきではある。けれども敢えてそれを理解しようとすることは、きわめて危険で、首を折って命を落とすことになる<sup>32</sup>。」

ルターによるこの論述部分に言及し、オットーは、ルターが合理的な表現でしか語っていないところにおいても、非合理的なヌミノゼな要素と一緒に響かせながら聞かねばならないのであるという<sup>33</sup>。

そして、オットーは、ルターという人物が、キリスト教のすべてを「信頼としての信仰」に置くということを理解するためには、この「深淵」を見ておかねばならないのだという。

「近づき難いものが近づき得ようになり、聖なるものが純粋な善となり、『優越』が親しいものとなる、といった対立・調和こそが、ルターの宗教における核心である<sup>34</sup>。」

しかし、後のルター派の教義学においてこれが定型化されていくと、この核心はみえづらいものとなる。

さらにオットーは、ルター派そのものは、キリスト教の神観念におけるヌミノゼなものを正しく理解しなかったのだという。つまり、神の聖性と「怒り」を道徳主義的な解釈によって一面化してしまった。ヨハン・ゲルハルト (1582-1637) 以来、ルター派は「超然たる無感動 *apátheia*」説を再び採用し、礼拝式から瞑想的で敬虔な要素が取り除かれていったのだという。

「言葉で表現できないもの、ただ感情の中でのみ生きているもの、教訓としては伝承され得ないものに対して、概念的なもの、教理的なもの、『教説』という理想が優位を占めていた<sup>35</sup>。」

このようにして、オットーはキリスト教教義学の課題として、神の観念における合理的なものを、絶えず非合理的な要素のもとに捉え、育むことを挙げている。

ここまで、『聖なるもの』第14章「ルターにおけるヌミノゼなもの」におけるオットーの叙述を確認してきた。『ルターにおける聖霊の直観』においては、ルターにおける合理的側面と非合理的側面の共存というあり方に言及するにとどまっていたものが、『聖なるもの』における叙述にお

いては、この「根本感情」、つまり非合理的要素の絶対的優越性というものが強調されるというようにシフトしていることがわかる。ルターを理解するためには、この非合理的要素を前提にすることが不可欠であるというのである。

## 5. 結び

本稿では、まず「神秘主義」というものが19世紀後半から20世紀初頭ドイツのプロテスタント神学においてどのように語られていたのかを確認した上で、オットー自身が自ら影響下にあったというリッチェルの神秘主義理解を整理した。リッチェルにおいて神秘主義というものは、倫理や現世における行為との関連で、それらから人間の目を逸らさせる、否定的なものとして捉えられていた。オットーは『ルターにおける聖霊の直観』では、非合理主義的なものに対し、否定的な態度はとらないものの、ルターにおける聖霊の役割の二重性(救済的・信仰的なもの、心理主義的なもの)として説明可能なものとみなしている。『聖なるもの』におけるオットー自身の弁明によれば、『ルターにおける聖霊の直観』においては、後にオットーがヌミノゼとして指示することとなる「根本感情」については、触れられてはいるものの、それがぼんやりと感じられているのみの状態なのであった。その後『聖なるもの』においては、非合理的な要素の絶対的な優越性が語られ、これを前提としない場合、ルター自身を理解することもできないとまでいう。本稿では、紙幅の関係上、『聖なるもの』におけるオットーの「神秘主義」理解を中心に扱ったが、『聖なるもの』以前に執筆された『ルターにおける聖霊の直観』における彼の神秘主義理解のさらなる解明は次稿に譲りたい。

また、オットーは、晩年に「倫理」の問題を集中的に取り扱っている。本稿で見て来たように、リッチェルは神秘主義を批判しており、道徳に「宗教的感情」を見出している。このようなリッチェルの合理性、非合理性の捉え方とは袂を分かつこととなったオットーは、神秘主義の一つの側面として倫理を捉えることとなる。1923年に出版された『西と東の神秘主義』においては、西洋と東

洋の神秘主義の代表的人物としてエックハルトとシャンカラを取り上げ、その両者の神秘主義体験において共通している点と相違している点を論じている。その相違点において取り上げられるものの中で大きな位置を占めるのが、倫理である。また、オットーの晩年、1932年に出版される論文集『罪と原罪：神学についての諸論文<sup>36</sup>』においても、宗教、倫理、神秘主義といった主題について論じられている。本稿は、オットーが宗教、倫理、神秘主義をどのように体系的に捉えていたかを解明するための布石となるだろう。

## 註

- 1 Rudolf Otto, *Das Heilige: Über das Irrationale in der Idee des Göttlichen und sein Verhältnis zum Rationalen* (München: C.H.Beck, 2004 (1917)), S.130-133 (=ルドルフ・オットー『聖なるもの』華園聰磨訳(創元社, 2005), 207-212頁。)以下、Otto, DH, と表記し、原語、山谷訳、華園訳の順に頁を表記する。
- 2 Rudolf Otto, *Die Anschauung vom heiligen Geiste bei Luther: Eine historisch-dogmatische Untersuchung* (Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, 1898) .
- 3 第1版から第4版までの書誌情報は以下の通り。以下、RGGと表記する。Friedrich Michael Schiele (hrsg.) *Religion in Geschichte und Gegenwart: Handwörterbuch für Theologie und Religionswissenschaft*. 1. Aufl. (J.C.B.Mohr, 1909-1913) ; Hermann Bunkel und Leopold Zscharnack (hrsg.) *Religion in Geschichte und Gegenwart: Handwörterbuch für Theologie und Religionswissenschaft*. 2. Aufl. (J.C.B. Mohr, 1927-1931) ; Kurt Gallig (hrsg.) *Religion in Geschichte und Gegenwart: Handwörterbuch für Theologie und Religionswissenschaft*. 3. Aufl. (J.C.B.Mohr, 1957-1965) ; Hans Dieter Betz (hrsg.) *Religion in Geschichte und Gegenwart: Handwörterbuch für Theologie und Religionswissenschaft* 4. völlig neu bearbeitete Aufl. (Mohr Siebeck, 1998-2007) .
- 4 RGG 4. Aufl., Sp. 1652.
- 5 RGG 4. Aufl., Sp. 1673-1674.
- 6 RGG 1. Aufl., Sp. 596.
- 7 RGG 1 Aufl., Sp. 608-611.
- 8 Fritz Dieter Maaß *Mystik im Gespräch Materialien zur Mystik-Diskussion in der katholischen und evangelischen Theologie Deutschlands nach dem Ersten Weltkrieg* (Würzburg: Echter Verlag, 1972) , S. 127-132.
- 9 20世紀初頭に雑誌『教会年報』に掲載された記事のタイトルからも、神秘主義を敵視、あるいは危険視している様子を窺うことができる。Maaß, *Ibid.*, S. 132-133.
- 10 *Ibid.*, S. 131.
- 11 RGG 1. Aufl., Sp. 617-618.
- 12 *Kirchliches Jahrbuch* 1916, S.11. 以下より引用。Maaß, *Ibid.* S. 128-129.
- 13 *Kirchliches Jahrbuch* 1921, S. 344.
- 14 Maaß, *Ibid.*, S. 132.
- 15 神秘主義あるいはオカルティスムスに対し好意的な記事としては以下。“Mystik und geschichtliche Religion” (Abdruck einer Probevorlesung von F. W. Schmidt, gehalten von der Theologischen Fakultät in Halle am 31. Juli 1920) (1921) ; “Der Okkultismus als band zwischen Religion und Wissenschaft” (1921) ; “Rilkes Mystik” (1924) ; “Der heutige Stand der okkulten Forschung” (1926).
- 16 宗教史学派に関しては以下を参照。Gerd Lüdemann und Martin Schröder, *Die Religionsgeschichtliche Schule in Göttingen* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1987)
- 17 Ernst Troeltsch, *Gesammelte Schriften, I: Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen*, (Tübingen: J.C.B. Mohr, 1923) , S. 854.
- 18 *Ibid.*, S. 855.
- 19 カール・バルト『十九世紀のプロテスタント神学下第二部歴史』安酸敏眞、佐藤貴史、濱崎雅孝訳(新教出版社、2007)、357-359頁。(= Karl Barth “Die protestantische Theologie im 19. Jahrhundert Ihre Vorgeschichte und

- ihre Geschichte III" in *Gesammelte Werke Band 13* (Zürich: Evangelischer Verlag, 1947)) .
- 20 アルブレヒト・リッチェル『神の国とキリスト者の生キリスト教入門』深井智朗・加藤喜之訳(春秋社、2017)、84頁。
- 21 バルト前掲書、361頁。
- 22 リッチェル前掲書、105頁。
- 23 バルト前掲書、361頁。
- 24 バルト前掲書、362頁。
- 25 リッチェルの神秘主義批判に関しては、以下を参照。佐藤敏夫『近代の神学』(新教出版社、1964)、116-120頁。; Maaß, *Ibid.*, S. 169-170.
- 26 Otto, *DH*, S. 123, 213-214頁。
- 27 ルターにおける神秘思想をオットーのルター解釈から分析しているものとしては以下を参照。金子晴勇『ルターとドイツ神秘主義』(創文社、2000)、第七章「ルターの神観における神秘的なるもの」259-282頁。
- 28 Rudolf Otto, *Die Anschauung vom heiligen Geiste bei Luther: Eine historisch- dogmatische Untersuchung* (Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, 1898) , S. 85.
- 29 Otto, *DH*, S. 119, 193頁。
- 30 H. ツァールント『20世紀のプロテスタント神学(上)』新教セミナー訳/井上良雄監修(新教出版社、1975)、60-61頁。
- 31 Otto, *DH*, S. 121, 195頁。
- 32 マルティン・ルター『卓上語録』(ワイマール版、6、6561。マンスフェルトの牧師アキラム宛にルターが書いたもの。) Otto, *DH*, S.127, 203頁。
- 33 Otto, *DH*, S. 127, 204頁。
- 34 Otto, *DH*, S. 123, 198頁。
- 35 Otto, *DH*, S. 133, 211頁。
- 36 Rudolf Otto, *Sünde und Urschuld: und andere Aufsätze zur Theologie* (München: Beck, 1932) .